

要 旨

令和2年(2020)から令和3年(2021)の新型コロナウイルスのまん延に伴う非常事態宣言の発出を受けて、どの公文書館ともに臨時休館措置を行い、まん延防止対応に追われたことは、記憶に新しい。

相模原市立公文書館においても、同様であり、3回の非常事態宣言の発出(発出の回数や時期には自治体ごとで違いがある)のたびごとに、最初は館ごとで臨時休館の起案をしていたものが、自動的に休館をする方向に変更したりしていた。

その影響は現在も引き続いており、相模原市立公文書館では、入館者数がコロナ前に回復したといえない状況にある。そのため、コロナ禍の精神的影響を克服し、入館者数を少しでも上向きにするためには、展示を担当する職員としてどのような展示を行っていかれば良いかを考えたのが本論考である。

併せて、平成26年(2014)10月に開館した相模原市立公文書館は令和6年度(2024)に開館10周年を迎える。10年間の展示のあゆみを振り返りながら、新たな10年間を迎えるための一つのマイルストーンとして本論考をまとめることとした。

結論としては、展示する歴史的公文書の徹底した精査、展示解説と講座(KOBORE話)を効果的に組み合わせた資料紹介の方法など、どれも当たり前に行っていることで、新鮮味はないが、不断の積み重ねが、理想の展示を導くと信じたい。また、入館者数増のための方策として、①公民館を通しての教室・講座等への浸透、②歴史研究団体への浸透、③企画展テーマ内容に合わせた各種団体へのPRの3点を取り上げた。歴史的公文書を読み解く、地道な作業が新しい地平に導く作業であると信じている。